

少々気になる

お話をひとついたしましょう……♡

実は、当パーティでは

稀に発生する現象がありまして……

貴女のような特別な方に限られますが♡

今回ご参加された殿方の中で、

特に強く惹かれあった方がいらっしゃれば……♡♡

その方との”運命の結末”を、

ほんの一瞬垣間見せることができます♡♡

ただし選ぶのは貴女ご自身♡

貴女は様々な男性に愛される

可能性がございます……♡♡

ピコンッ！

01番の男性……彼は私の胸元で優しく囁きながら、そっと唇を離した。

「ん……ちゅ……♡ちゅ……大丈夫だと言ったでしょう？♡♡待っていますから……♡♡
あとの2人に抱かれてから、考えてください……♡♡♡僕のが忘れられなかったら……
その時は……♡ちゅ♡♡♡♡」

きゅんきゅん……♡♡♡

（こんなに優しく……♡♡♡えっただけ意地悪な人……♡♡♡ ああん♡♡♡忘れ
られるわけないよお♡♡♡♡♡）

ちゅううちゅうう♡♡♡♡♡

乳首を強く吸いながらの囁きに、心臓が高鳴る。まるで幼児のように扱われる羞恥と、幸
福感が入り交じった複雑な感情に溺れそうになりながらも、意識的に別の事を考えようと

したその瞬間だった……。

(頭ナデナデ……♡♡♡♡嬉しい♡♡直接ナデナデして欲しいよお♡♡♡♡しゅき……しゅき……♡♡♡♡え?)

彼はカーテンの上から、私の頭を撫でて、去ろうとしていた。

(ま……待つて、行かないで……私、私は貴方が……♡♡♡♡)

シャア……………ッ!!!!!!

私は、力強くカーテンを引いた。

「……………01番さん」

直接見た01番の男性は、写真以上に端正な顔立ちだった。清潔に整えられた髪、張り

のある肌、適度に揃えられた眉毛……涼しげな眼差しが、真っ直ぐこちらを見つめている。シャツの袖を少し捲り上げた逞しい腕には、先ほどまでの優しい手つきからは想像できないほど、荒々しい血管が浮き出ている。

「……会いたかったです、07番さん」

彼の低く温かい声が耳元で溶ける。全身が震えるほどの嬉しさと安堵感で、胸が幸せいっぱいになる。

「私も……会いたかったです♡」

自然と手が伸びて、彼のシャツのボタンに触れた。一つ一つ外していく指先に、期待と緊張が走る。丁寧にネクタイを解いていく。布の擦れる音と共に、彼の素肌に触れた瞬間、私は鳥肌が立った。

「……………かっこいい…………♡」

思わず漏れた声に彼が微笑む。シャツを脱ぎ捨てた彼の上半身は、スーツでは分からなかったが、意外にも鍛えられた筋肉で引き締まっている。その美しい肉体に、魅せられたように暫く見入ってしまった。

「……もう、見過ぎですよ♡」

上品にくすくす笑いながら、彼が私の頬に手を添える。そのまま顔を近づけてきたので、慌てて臉を閉じた。

「……僕も人のことは言えません。貴女に見惚れている……」

ちゅ……♡♡

「僕を選んでくれて、ありがとう……♡」

柔らかい唇が重なる。最初は触れるだけの軽いキスだったが、次第に深くなり舌が絡み合う。僅かに私のお股の匂いがあるのが、クンニの事後を思い出させる。お互いの口内を行き来して、吸い合う。どちらのものとも知れない吐息と、唾液の混じり合う水音が、頭に響いた。

「……んっ♡あふあっ♡……あ、あっ……んふうっ♡……あっちゅう……♡♡♡」

「んっ……ちゅ……ぶはっ……♡」

息継ぎのために一度離れたものの、すぐに再び吸い寄せられる。唾液の絡んだ舌が熱い。今度は彼の手が背中を這い上がり、首筋に舌を這わせてくる。

「ひゃあっ!?!♡♡♡」

予期せぬ刺激に身体が跳ねると、彼は顎の下あたりに優しく口づけした。彼の前髪が耳に当たりくすぐったい、鼻から息を吸うと、整髪剤の香りが届いた。

「こ……弱いんですね♡……可愛い。感じてくれる箇所が多くて、漢冥利に尽きます……♡」

悪戯っぽく囁きながら、今度は肩口に歯を甘く立ててくる。微かな痛みと快感が同時に走り、ゾクゾク背中が仰け反るが、逞しい腕に抱きしめられて動けない。重なり合う素肌が信じられないくらい気持ちが良い。まるで、初めからそうだったみたい、肌と肌が吸い付いて、触れた部分が幸せになる。

「やあ……ん♡♡♡いやあ♡ そんな……そんな風に、焦らさないで♡♡♡恥ずかしいよぉ♡♡えっちな触り方しないで……♡♡やあぁん……♡♡♡♡」

その反応を楽しむように私のイヤ♡を一切無視して、手と唇を動かし続けた。何度も優しく噛み付いてきた後、ついに唇はおっぱいに辿り着いた。大きな手で包み込むようにぽよんぽよん♡揉まれながら、コリコリ♡硬くした乳首を親指で転がされる。

「あ……あん♡ちくび……っ♡」

「可愛い乳首だ……ずっと顔を見ながら吸われるのを、我慢してましたからね♡♡いっぱい甘やかしてあげます……♡♡」

「あっ……んあっ!!♡ やん♡♡ あっ、ああんツツ♡♡だめ……っ♡♡はあん♡♡ あっあっ♡ ちくび……♡ちゅぱちゅぱは……♡♡やああん……♡♡甘やかすって言ったのに♡♡いじめちゃだめです……ツツ♡♡♡♡」

彼の指先が乳首を引っ張るように摘まむと、ビクツ♡と肩が震えた。同時に片方の主張する乳房を口に含み、舌で乳頭を飴玉みたいにくろころ♡と転がす。

ちゅるちゅる♡♡ちゅるちゅる♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅるちゅる♡♡ちゅっ……
ちゅぱあ♡♡

「はあん……っ♡」

「……ん♡♡虐められるの、気持ちいい？♡♡」

発情した目尻を赤くして、セクシーな顔が私を見つめている。唾液で濡れた薄い唇は、危険な魅力で赤みを増していた。ぷっくり腫れていた乳首を、そこに押し付けるように胸を反らす。淫乱な乳首に喜ぶ彼の唇は、遠慮のない力強さで、乳輪から摘まれた。

きゅ……♡きゅうう……♡きゅむにゅ♡きゅんッ♡♡
コリコリ……♡♡しこしこ♡しこしこッ♡♡♡

「んああ……♡♡ああ……♡ちくびシコシコしゅーい……♡♡ちくび、クリちゃんみたいな、敏感お豆になっちゃう……♡♡♡♡」

「可愛いですね♡♡乳首もクリトリスのように、クンニ好きかな？♡♡舐め回して、気持ちよくなりましょうか……♡♡♡♡」

「きやああ……う♡♡♡あうう……♡ちくびクンニ、すき……♡♡すきだけど、ぺろぺろは授乳みたいで……恥ずかしいです……♡♡♡ふぁ……♡♡」

「クンニなのか授乳なのか……♡♡あまり、可愛らしい事を言わないでください……抑えられなくなる……んっ♡♡♡」

ちゅ……れろ♡れろ♡れろお♡……くちゅう♡くちゅ♡くちゅ♡こりゅこりゅ♡にゅぽ♡にゅぽ♡にゅぽ♡にゅぽ♡♡くちゅ……う♡♡♡

「っ、あ♡……あんっ♡♡だって♡だって、貴方がえっち……すぎるからぁ……♡♡声、我慢できない……ッ♡♡♡」

「……ん、声出ちゃうね♡♡可愛い♡♡♡」

大きな手に背中を支えられ、涎を垂らして淫らな言葉で喘ぐ。彼の腕の中で愛されて、トロトロ♡に溶けてしまう。巧みな舌技と指技……左右異なる刺激に翻弄されていると、突

然お尻を鷺掴みにされた。

「やっんっっ!?!♡♡♡♡」

驚いて声を上げると、彼はお尻の丸いラインを確かめるように撫でながら、耳元で囁いた。低く掠れた声が、耳を犯されてるみたいに響いて、性癖タイプ過ぎる。

「貴女は何処もかしこも、柔らかいんですね♡ああ、乳首とクリは硬くなりますか♡♡可愛
い……恋人の全部を……触りたいです♡♡♡」

さわ♡ さわあ♡ さわ♡ さわ♡ さわあ♡ さわあ……♡

「あん♡ずるいです……♡♡そんなこと、恋人だなんて言われたら……♡♡♡」

「……嫌ですか？」

「……貴方なら、いやじゃないから……ずるいんです♡♡」

マッチングしたばかり、気持ちが高まっている今……恋人になった彼を否定できるはずもない。むしろもっと、求めるように荒々しく触れてほしいと思う、被虐的で淫乱な自分がいる。それを察したように、彼が腰を大胆に引き寄せると、股間の固くなったものが、布越しに私の太腿に当たった。

「あ……♡♡♡♡」

その熱さと硬度に、思わず上擦った声が出る。彼の興奮を感じて嬉しくなるおまんこが痙攣して、じゅわじゅわ♡彼を迎える準備を初めた。おまんこは彼のおちんちんの味を知っているからこそ、待ちきれないとばかりにねちやねちや♡愛液の涎を垂らしている。

「さっき抱いたばかりなのに……貴女に触れただけで、また、こんな風になってしまいました……♡♡どうでしょう？♡♡♡♡」

照れ臭そうに言う彼が、愛おしくてたまらない。私は答える代わりに、彼のベルトに手をかけて外し始めた。早急に金具を外しファスナーを下ろすと、すでに先走り濡れた下着が見える。

「ひゃあ……♡♡♡」

お互いに赤面しながらも、熱い視線を逸らさない。耐えきれず私の方から目を伏せて、お股をもじもじしてから深呼吸した。意を決して私が彼の下着を下ろすと、あの大きく屹立したものがあらわになった。

ブルンッ……!!♡♡♡

彼のおちんちはディスプレイの画像で知っているし、おまんこで味わっている。ただ挿入済みとは言え、直接見るのは初めてになる。私の目の前で天高くそそり勃つその男根は、想像以上の雄々しさだった。

長さはゆうに平均を超え、太さも膣口を広げる為にあるような、凶悪なサイズだ。しか

も亀頭の傘は厚く張り出し、カリ首の段差がくつきりと目立つ。他の雄の種を掻き出すと言わんばかりに、凶器じみた形状をしている。

(あああ♡こんな……入るかも怪しいサイズの♡♡カッコイイすごいおちんちんが♡♡さつき、本当に私の中で暴れてたの♡♡♡♡)

思い出しただけで、子宮がキュン♡と疼いた。あの張り出したカリ高が、膈壁のヒダヒダ♡を一枚一枚捲り上げて、引つ張られていく感覚……ミチミチ♡入口を掻き分けながら、どちゅどちゅ♡最奥まで届く圧迫感……♡♡ビッグビッグ♡熱い幹がおまんこ中でドクドク♡脈打つ、生々しくリアルな感触……♡♡

雄の匂いが強くなり、すべてが鮮明に蘇ってくる。

「すごい……♡♡コレが……私のおまんこに入っちゃうんだ……♡♡♡♡」

思わず喉がゴクリと鳴る。彼のモノから漂う、強い雄の香りにクラクラしながらも、視

線はおちんちに釘付けだ。艶めかしく光る亀頭が私を見ている。太く張った茎の表面には、血管がグロデスクに脈打っていた。

「はい♡僕のコレが……貴女の間で……全部覚えてます♡♡」

無意識のうちに、指が伸びていた。そっと触れると、ぴくり♡と反応する。

「う……♡♡」

「いみんなさいつ♡♡でも……欲しくて……♡♡♡♡」

「謝らないでください♡」

彼は私の手を取ると、自分の手と一緒におちんちんを握らせた。手のひらに収まりきらないソレは、独立した生き物のように脈うち、お腹に付くくらい反り返っている。耳元で囁かれると同時に、指でクリトリスを軽く弾かれた。

びんッッ♡♡

「あんっ♡♡ だめえ……っ♡ クリちゃん、いじめないでえ♡♡♡♡♡」

「ずっと……こうされたくて婚活に来たのでしょう♡♡ 僕は、クリトリスを弄るのが好きなんです♡♡一緒に……気持ちよくなりましょう……♡♡♡♡」

その言葉と共に、彼の手が動き出す。先端からおちんちんの竿全体にかけて、手のひらで擦り上げられる感覚に、ドキドキ♡してしまう。私が彼をしこしこ♡する早さを覚える
と、手を離された。

「……そのまま、扱いて♡」

手のひらでおちんちんをしこしこ♡手コキしながら、クリトリスをツンツン♡突かれる刺激に酔いしれていると、不意に彼のもう片方の手が、私の秘所に触れた。びっくりして、

おちんちんから手が離れてしまった。

「ひゃっ!?!♡♡♡ ひゃああっ♡♡♡ あっあっ♡♡♡ やあん♡♡♡ クリちゃんおちんちんでツンツンはだめえ♡♡♡ あふうっ♡♡♡ 手マンくちゅくちゅくしないでえ♡♡♡♡♡」

彼はわざとらしくゆっくりと腰を前後に動かした。ガチガチ♡に勃起したペニスが、私のクリトリスにぬるぬる♡と押し付けられる。先端が恥丘を這い、エッチなカリでクリトリスを擦り上げるように押し付ける。擦り付けて、撫で回す……意地悪なおちんちんで、びんくの頭がいつぱいになる。くちゅくちゅ♡♡と粘膜が触れ合う音が、密室に響いている。

ぬちゅ…っ♡ぬちゅ…っ♡ぬちゅ…っ♡ぬちゅ…っ♡ぬちゅ…っ♡ぬちゅ…っ♡♡♡

(はあ♡♡♡これ♡すごくエッチなこと、されてるのかも♡♡♡音も大きくて……耳だけでも、感じちゃうっ♡♡♡)

透明な先走り汁が、私の敏感な場所に塗り広げられていった。じんわりとした雌の本能

が湧き上がり、おまんこの入口がくぱくぱあ……♡と開き始める。

「すごい……もうこんなに濡れますよ♡ 見て下さい♡♡貴女のお汁で、僕の指から手首まで、ぬるぬるですよ♡♡♡今、かき混ぜると……どうなりますかね？♡♡」

彼は先端を指で撫でてみせた。糸を引く粘液を見せつけるように、上目遣いで笑う。

ぺちや……とろお……♡♡♡

「はあはあ♡いま、掻き混ぜられたら♡♡♡おまんこ♡♡ぐちゅぐちゅになっちゃいます……♡♡♡」

（だって……かっこいいし……♡♡♡そんな人にエッチなことされるの、気持ちいいんだもん♡ 彼のおちんちん見てるだけで……子宮がキュンキュンしちゃうよお♡♡）

おちんちんでぐりぐり♡虐められているお豆の下……その穴は、ぐっしりと湿って

て、彼の指が容易に迎え入れてしまった。クチュクチュ♡わざと卑猥な音を立てながら、私を興奮させるように、大胆に掻き混ぜてくる。私の顔が、真っ赤になるのがわかる。

くちゅくちゅく……♡くちゅくちゅく……♡ぐちゅう♡ぐちゅぐちゅ♡♡にゆる♡ず
ぽっ♡♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡♡♡

「あつ……あん　だつ……めえ♡気持ちいいのお♡やめてください……っ♡♡♡あ、あ
あぁ〜ッッ♡♡♡♡」

「嘘つき……♡♡♡やめて欲しくない癖に♡……気持ち良くて、めちゃくちゃにされたいんでしょ♡♡♡イキたいなら大人しく、じっとしてて……♡♡」

その通りだった。彼の指が動くたびに痺れるような快感が走る。今辞められた方が辛い人が変わったように、雄味全開になった彼に、心の中ではもっと虐めて欲しいと思つてゐる。彼の言葉責めが好きだということを、認めてしまえば楽になるけれど、それを知られたくないという、矛盾した思いがある。

「女の子の弱いところ……♡♡♡触られて恥ずかしいですね♡♡♡」

優しく指の腹でザラザラ♡ぷくぷく♡Gスポットを探り当てられると同時に、激しく前後に掻き回された。泡立つくらい荒々しきで、見た目は派手なガシマンなのに、膣の中は女性が喜ぶ、計算された動きをしている。

♡♡♡
クチュクチュツツ♡♡♡クチュクチュツツ♡♡♡クチュクチュツツ♡♡♡クチュクチュツツ♡♡♡

「オッ?!♡♡♡おっ♡♡♡おっ♡♡♡あ、ああっ?!♡♡♡ひゃああんツツ♡♡♡あ、ん、ふうう……ふううっ……ああん♡♡♡ああん♡♡♡ゆび、気持ちいいです……っ!♡♡♡手マン♡おまんこ♡♡♡うれしい、ですっ♡♡♡やああんっ♡♡♡♡♡♡」

腰が砕けそうになるほどの快感が、波のように押し寄せる。それでも彼の手は止まらない。むしろ、さらに激しく動かす。逃げたくても、クリトリスにおちんちんの先を押し付けられて、快楽からは逃げられない。

(あ……出されちゃう……♡♡♡♡まんちょ……妊娠しちゃう……♡♡♡♡♡)

「やぁあんツッ！？♡ 出さないで……っ♡♡♡♡中だけは……らめえ……っ♡♡♡♡」

「うるせえ……♡♡さっきも出したし♡♡♡♡全部受け止めるよ♡♡♡♡ビッチなんだから当然だろ？♡♡♡♡」

どぴゅッ～！？♡ ぶゆるるるっ！？♡♡♡♡どぽどぽッ♡♡たぶん………ッ♡♡♡♡

「ひぁぁあんツッ！？！？♡♡ イクっ……っ♡ 中出してイっちゃうッ！？♡ 嫌なのに……気持ちよくて……♡♡♡♡ザーメンごっくんしちゃったあ……♡♡♡♡やぁんツッ♡♡ビッチになっちゃうッ！？！？♡♡」

意識が朦朧とする中で……暖かい精子が注ぎ込まれる感覚だけが鮮明だった。全て終わった後も、しばらく動けずただ荒い呼吸を繰り返すしかなかった。そんな私の肩を、乱暴に押さえつけながら彼は囁いた。

「ねえ……最初の男の方に決めかけてたでしょ？ でも、オチンポぱんぱんハメられたら、わかんなくなって

んの……知ってるからな♡♡♡ちよろマンコ可愛すぎる♡♡♡♡」

ぐったりとしている私が反応する前に、06番の彼は鼻で笑った。

「……次はもっと虐めてやるよ♡」

嘲笑混じりの捨て台詞を残して、彼は背を向けた。バタンと、無慈悲な音を立てて扉が閉まる。

(行かないで……違う、違うの……私は……)

「……待って！」

叫んだ声は自分のものだとして理解するまで、数秒かった。理解した時には強い意志で、衝動のまま身体が動く。そこから飛び起き、カーテンを掴むと裂くように開いた。

カシャ——ッ！！

裸足、裸のまま、ドアを開けて彼の背中を探す。ムーディーな個室の間接照明より、シャンデリアの広間は眩暈がするほど眩しい。無防備な肌に直接あたる、冷たい空気。冷たさを忘れるくらい、ばくばく♡心臓が熱い。

「……なっ！ お前、裸で……！？」

振り返ろうとした、06番の男性の表情は読めない。私は生まれた姿まま立ち尽くした。羞恥心はあったけど、それよりも、どうしても伝えたい気持ちの方が大きかった。

「貴方がいいの……！ お願い、行かないで！！」

必死に腕を伸ばし、後ろから抱きついた。広い背中に胸を押し当て、引き締まったお腹のあたりに両腕を絡ませる。

「……っ！ 何してるんだよ変態……」

精いっぱい涙声で訴えると、彼の逞しい肩がわずかに震えた。骨貼っていて、筋肉に覆われた鋭利な肩甲骨のあたりに鼻を埋めて、告げる。

「……貴方に抱いて欲しくて、来たの。貴方はすぐ行っちゃうから」

「は……？ ここが何処で、素っ裸で自分が何言ってるか……わかってんの？」

言葉は冷たいのに、抱きしめた背中が微かに脈打っている。彼が逃げ道を与えたとしても、私は力を緩めない。彼のシャツの裾を握りしめたまま、必死に言葉を続ける。

「貴方じゃないとダメなの……！ 初めてなの、こんな気持ち……♡♡ずっと……おまんこの中で、貴方のおちんちんが動いてた感覚が消えないの……♡♡イジワルされて、お豆を剥かれて……放置されたり♡♡♡いじめられて……怖かったのに気持ちよくて……っ♡♡私、変になっちゃったの♡♡♡」

「……マゾ初心者が♡ ちょっと乱暴に抱かれたくらいで、その気になる女が調子に乗んなよ？ 最後に抱かれた男を好きになるだけじゃね？♡」

低い掠れた声と共に、割れ物に触れるような手付きで腕を払われそうになる。ポンポン♡と宥めるような、その優しい力に怯えながらも、無我夢中で額を擦り付け、必死にしがみつく。

「違う……！ 乱暴だからじゃなくて……貴方だから……気持ちよかったんだと思う……♡♡服なんか着てる暇がないくらい、貴方に抱かれたかったの……♡♡♡」

ポロポロ♡涙と共に本音が溢れる。すると遂に彼が、私の腕を外した。とたん離された悲しみに震えていると、無言で大きな手がそっと私の頭に触れた。それは撫でるというより、髪を梳くような動きだった。裸のままなのに彼の手が温かくて、全身が燃えそうだった。

「……はぁ……馬鹿だな。お前♡」

ため息混じりの呟きは、呆れているようでどこか……私の願望かもしれないが……照れているようにも聞こえた。

そのとき突然、彼が素早く私を壁に押し付ける。乱暴な触り方なのに痛みはない。裸のおっぱいが彼のシャツに触れ、勃起乳首がすりすり♡擦れつつも、彼の熱がドクドク♡伝わった。

「じゃあさ……責任取れよ？ 俺、寝取るのすきなんだけど、もっとひどい目に遭うってわかってんのか♡」

挑むような、鋭い眼差しに身体が震える。でもそれは恐怖じゃない。ドキドキ♡期待ときゅんきゅん♡興奮で、潤沢な愛液が太ももを伝い、ぢゅわぢゅわ♡脚の間が潤むのがわかった。

「……うん♡貴方になら……♡♡私を、いくらでも虐めて……ください……♡♡」

震える声でそう答えると、彼は悪い顔で笑った。驚くくらい優しい手付きで、そっと私の顎下を撫でる。

すりすり……♡すりすり……♡♡

頭の中で誰かの声が聞こえた気がしたけど、06番の男性を目の前にした、今の私にはどうでもよかった。

(私を選んでくれた12人の方たち……01番さん……12番さん、ごめんなさい……♡♡♡♡私、格好良くて意地悪な♡♡06番さんのおちんちん命令には♡♡勝てないの♡♡♡♡)

「ふーん、いい子じゃん♡♡ 俺、そーゆーの好き♡♡♡」

パチパチパチパチッ！！

「……女性07様、男性06番様♡♡マッチング成立、おめでとうございます♡♡♡」

男性スタッフが拍手しながら、私たちに近づいてきた。突然の来訪者に驚愕する。思わず彼の胸に顔を埋めるように、俯いた。

パチパチパチパチパチパチッ！！！！

『ご成立、おめでとうございます♡♡♡♡』

あの謎めいた男性スタッフの後ろにも、控えていた数人のスタッフが並んでいた。満面の笑みで、誰もが私の裸身を凝視している。

「おめでとうございます♡ 素晴らしい勇気と愛情ですね！♡♡ マゾまんの０７番様、ドエス策士の０６番様は、お似合いだと思っておりました♡♡♡」

男性スタッフの声が明るく響く中、私は必死に身体を隠そうと彼のシャツにしがみついた。「やあ……♡私…裸で……♡♡♡」と、消え入りそうな声で呟くも、私を抱きしめる０６番の彼は、低く笑った。

「自分から裸で飛び出したんだろ……痴女みたいにさ♡♡」

「あ……でも、でも……♡♡みんな見てる……恥ずかしいです……♡♡♡」

耳まで真っ赤になった顔を上げられない。私達を囲むように並ぶスタッフたちの、いやらしい視線が針のように刺さる。パリッとした仕立ての、高級そうなスーツを

着た男性たちが、口々に卑猥な祝辞を述べた。

「素晴らしいマゾ雌っぶりです♡」

「おまんこも涎を垂らして喜んで、感動しました♡」

「さすが今日の人気ナンバー１のクリトリス嬢♡可愛らしくも、淫らなお豆さんですね♡」

「クンニで相性を確かめた♡おまんことおちんぼが恋しても、当然ですね♡♡」

場違いな拍手が高鳴るたびに、裸の肌が震える。おっぱいを彼の胸板で必死に隠すも、無防備な秘部は足だけでは隠しきれない。内腿を伝う愛液が、ポタポタ……♡ポタタ……♡床に滴り落ちるのが見える。溢さないよう慌てて指をおまんこに入れると、ぐちゅうツツ♡♡と卑猥な音が響いて、男達は大笑いした。０６番の彼は、私を抱き締めながら甘く囁いた。

「……恥ずかしがっておいて、オナるの我慢できなかった？♡♡♡」

こしょ……♡♡こしょ……♡♡♡

くちゅくちゅく……♡♡♡

「ひゃああんっっ♡♡あぁっ♡はあはあ♡あ、あの、恥ずかしいです……♡♡でも、お汁落ちちゃから……♡♡♡塞がないと……♡♡ああん、見ないで……

見ないでくださいっ♡はあ……はあ……っ♡♡♡」

涙声で懇願するが、彼は私の顎を掴んで無理やり顔を上げさせた。発情した赤い視線に射抜かれながら、耳元で囁かれる。

くちゅくちゅく……♡くちゅくちゅく……♡♡

「どうしたんだよ♡♡マゾ雌彼女の分際で……大勢に見てもらえて興奮してるくせに♡♡ エッロいおまんこ濡らして……俺の前で公開オナニーまでして♡♡♡ 意地悪なこと言われながらクリアクメしたいんだろ♡お前の変態性癖と、マッチングした俺も大概だから、いいけど♡♡♡二人でパーティ公認カップルにして貰えたんだ……よかったな？♡♡♡」

くばあ……♡♡♡♡

ぐっと腰を引き寄せられ、足をガニ股に開かされる。くちゅ……♡と粘つく音が周囲に響いて、屈辱的な膝が震えた。自然と彼にしがみついてしまう。

「あんっ♡やだ……あ…♡♡ おまんこに挿入れてほしくて、ウズウズしちゃうから……♡♡おおっっ♡♡ふっっっ♡♡ふー……♡♡ふー……♡♡♡イジワル……しないで♡♡♡」

「嘘つき♡物欲しそうな顔して『あんっ♡』って鳴き声出してたくせに……♡♡♡散々クリちゃん虐めてあげたんだからさあ……♡♡もっと近くで、俺が育てたい甘勃ちクリ見てもらえよ♡♡♡」

つう…………♡♡♡

すり……♡すり……♡♡びくんびぐんツツ♡♡

「おっほっ？！？！♡♡」

彼の指が、クリトリスをなぞるように蠢く。私の指が埋まったおまんこがじゅわじゅわ♡と濡れてしまう。じんじん♡甘い感覚が駆け上がってきて、ピクピク♡肩が跳ねるその度に、周囲の歓声が上がる。

「まあまあ……そんな可愛いことを♡♡」

「はあ、何て敏感なんだ……♡♡♡男の理想のエロ女性じゃないか♡♡♡♡」

「ぜひ磨かれた極上のクリトリスを、近くで拝見したいです……♡」

ピクピク♡ピクピク♡ピンピンピンピンっ♡♡

彼の腕の中で背中を反らせると、乳首が気持ちよくなってしまふ。おっぱいの先端を彼の胸板に押し付け

て、コリコリ♡と突起が擦れる快感に酔った。

「ああん……♡♡ 甘勃ちお豆え♡♡♡みられちゃっ
てる……っ♡♡♡やだやだあ……♡ おまんこから、
どんどんお汁が溢れてきちゃうから……っ♡♡♡」

羞恥で泣きそうになるも、マッチングしたばかりの身体は正直だ。すぐにクリトリスを扱くのを再開してしまった。おまんこを弄る指は、くちゅくちゅく♡無意識に止まらなくなる。

「お♡♡ おっおっおっ……ッ♡♡♡」

スリスリッ♡♡スリスリッ♡♡カリカリ♡カリ
カリカリっ♡♡シコシコッ♡♡コリコリ♡コリコ
リ♡♡

「ほらほら……俺の身体で、乳首スリスリしてないで♡
♡♡ちゃんと自分で言えよ？ 『私は06番様専用のマ
ゾまんこです』 ってさ……♡♡♡」

へこへこ♡へこへこ♡♡へこへこ♡♡♡

(ああ……わたし……♡支配されてる……♡♡♡)

周囲のスタッフたちの視線が集まる中、はあはあ♡息

を荒くした私は、ふうふう♡吐息混じりの震える声で、おまんこ宣言した。

「わ……私は……♡♡♡06番様専用の、マゾ奴隷まんこです……♡♡どんな恥ずかしいことでも、貴方のためなら喜んで受けます……♡♡どうか……お好きなように……♡♡クリトリスを絞って下さい♡おっぱいも♡いやらしい、おまんこも、お使い下さい……♡♡♡」

パチパチパチパチッ！！

言い切った瞬間、観衆から拍手と歓声が上がった。羞恥の極みだった。それでも心の奥底で、甘美な充足感が広がる。この人になら全て捧げられる……そんな昏い予感がしていた。

「そっか……♡じゃあご主人様のために、精一杯オナニーショーしてくれよ♡♡」

彼の声は低く甘く、耳の中まで犯すように響いた。次の瞬間、力強い手が私の肩と腰を容易く掴むと、膝裏をぐいっ♡と持ち上げられた。

「ひゃあんッ♡♡え？ や、やああ……♡♡♡♡」

あっという間に、つま先が床から離された。抱き上げ

られ、彼の胸板に背中を向けた……子供がおしっこを強制されるような、恥ずかしすぎる体勢になる♡遅い身体に貼り付けられるように、がっしり支えられている。プライベートな場所……無防備なおまんこと、恥ずかしいアナルを突き出しまま、固定されてしまった。

(あっやだ♡ これじゃ隠せない……やだあやだあ♡ 全部丸見えになっちゃう……♡♡クリトリス勃ってるの见られちゃうよお……♡♡♡)

両足が地面につかない不安定な状態で、ピクピク♡お豆ちゃんを突き出した格好に、軽くパニック状態になる。助けを求めて振り向くと、至近距離に彼の綺麗な顔があった。

(ああん♡♡♡やっぱりかっこいい……♡♡♡♡こんなイケメンが、私にエッチなことをしてるなんて……♡♡♡)

獲物を見るような、鋭い視線に捕らえられた。周囲のスタッフたちは私の正面に陣取り、それぞれスラックスのファスナーを下ろして、好奇と期待に満ちた視線を投げかけてくる。

「や……おおんっっっ♡♡か、ひゅ……♡♡♡あ、♡あん♡あんっ♡♡ま、待って……くださ……ああ

んッ♡♡こんな、格好で……♡♡♡」

びくんびくんッ♡♡びくんびくんッ♡♡

「マゾ雌奴隷は、否定なんかなくていいんだよ♡ ほら……みんなが見てる前で、ちゃんとオナニーショーしろ♡♡♡」

言い終わるや否や、腕だけで私を支えている彼の左手が、器用におっぱいに伸びてきた。まるで所有物を確かめるように、ぐにゅり♡と握り込まれる。敏感なおっぱいを乱暴に揉みしだかれると同時に、うなじを舌でゆっくりとなぞられた。硬い爪が乳首に触れそうで触れない。焦らすような愛撫に、おまんこの奥が熱くなるのを感じる。

むにゅうっ……♡♡れろれろ……♡♡♡

「おほおっ♡あん……っ♡♡」

小さな声だけれど甘イキした鼻息が漏れた途端、彼が嘲笑うように囁いた。

「もう完全にイキ癖ついて……♡♡♡本当に恥ずかしいよな♡ でも、興奮してるんだよな♡♡♡ 俺とマッチングした恋人なら……どうすればいいか分かるだろ♡♡」

「これの中に入れてさ～思う存分味わったらどうなるかな？♡♡♡」

「そ……それは……♡♡でも、ルールで……♡♡♡」

「俺……配信でお世話にしているみたいじゃん？♡♡ねえ黙ってたら、バレないよ♡♡♡みんな、ハメてんじゃないの♡♡♡俺の恋人になってくれたら、毎日クンニもいっぱいしたげるのになぁ♡♡おちんちんハメハメしたいよ♡♡♡♡」

甘くねだる声色で誘惑してくる。何度もイカされ続けたクリトリスは完全に充血し、勃起しきっているのが自分でもわかる。一瞬迷ったが……もう後には引けないと思った。それに正直なところ、彼のことが気になり始めていたという理由もある。

手を引かれるまま、胡座した彼の上……おちんちんにおまんこを擦り付けた。腰を落として、ひとつちなろうとした瞬間……。

ピピーッ！

『接触時間終了です。これにてご挨拶が1順した為、中間クンニは終了となります。各男性の方は退室してください。ご休憩を挟み、参加者の皆様は気になるお相手を

2人までご投票ください』

アナウンスの音声によって現実に戻される。

「あちゃ〜♡ごめんね……時間切れみたいだね〜♡」

寂しそうな表情を見せつつも、すぐに笑顔に戻った彼は、私のおまんこをタオルで拭こうとした。

(いや……！ 終わらないで……！！ 私はもう、貴方しか……♡♡♡♡)

ドンッ —— —！！

「おっと？」

私は咄嗟に彼の首にしがみついた。タオルを持って立ち上がろうとしていた彼が、不意打ちをくらってバランスを崩し、シーツに沈む。そのチャンスを逃さず、馬乗りになると腰を落とした。

じゅぷ……んツツ♡♡

「うづっ……！！♡♡♡」

シリコンボール入りの太すぎる竿が、一気に入口を貫通する。内臓が押し上げられるような圧迫感と、じわじわ♡痺れるような快感が同時に襲ってくる。

「うっ♡んっ♡~~~~っ♡♡♡」

「うわあ……えっろお♡♡おまんこ♡がんばれ〜♡がんばれ〜♡♡♡」

じゅぶうじゅぶう♡じゅぶっ♡じゅぶう♡じゅぶうううう~~~~っ♡♡ずゅっぽおんっ！！♡♡♡♡

「あ~~~~っ！！？♡♡♡ 奥まで♡♡ズッポリおちんちん、きてりゅっ♡♡ こんな、つよつよおちんちん初めてええっ♡♡♡」

彼が下から見上げるその目が、驚きで見開かれているのが分かる。でも構わない。今すぐ、粘膜で繋がりたかったのだ。

「あーあ〜♡♡いけないんだ〜♡♡♡マッチング前のハメハメはルール違反だよ〜？♡♡ でも……まさか君から来てくれるなんて思わなかったなあ……♡あ嬉しい誤算って奴かな〜？♡♡」

余裕たっぷりの彼の声に、悔しさがこみ上げる。でもその感情すら燃料となって、気持ちが昂ぶってくる。腰を前後にスライドさせると、おちんちに埋め込まれた球体が、膣壁をゴリゴリ♡削る。

「んッッほおッ！？♡♡♡ すごおッ♡♡ これが本当に♡♡ おちんちん……？♡♡ このシリコンボールが……おまんこ♡♡ごりごり抉ってきてるっ♡♡ 女が喜ぶやつうッッ♡♡ああんッッ♡♡ダメッ……腰止まらない……っ♡♡♡♡」

じゅぽっ！♡ぐぽっ！♡ずぷっ！♡どちゅっ！♡♡♡

粘つく音と共に、潤滑油代わりの愛液が滴り落ちる。彼の腹筋に手を置いて、必死にバランスを取りながら夢中で淫らに踊った。

「あひいッ！？♡ あっ！？ おっ！？ おんっ！？♡♡ 暴れ馬に乗ったみたいに♡♡♡ピストンしゅごいいい……っ♡♡ おまんこ♡受精しちゃう♡♡アクメ汁欲しくなっちゃうのおッ！？♡♡ ん、アアアアア……イックウウッ！？！？♡♡♡」

「やーん♡俺、襲われちゃったあ♡♡あはッッ♡♡自分で動いちゃうなんて……随分淫乱なんだね～♡♡♡ おまんこビクビク痙攣してるよ？♡♡ もうイキそうなん

でしょ～？♡♡♡」

「あひッ！？♡ イクラッ！？♡ だってえ……気持ち良すぎて抑えられないのおおッ♡♡ んほおおおぶッッッ♡♡イグイグイグウッ！？！？♡♡♡ んおっほおお～～～おおおおおズおっっ！？♡♡♡」

ぷしゃああっ！！♡♡♡

盛大に潮吹きしながら達すると同時に、痺れた背中が反り返る。しかし絶頂の最中でも、おちんちん媚び媚び♡腰振りには止まらない。むしろ、膣内の痙攣は加速していくばかりだ。

「あ～あ……我慢できなかったんだ～♡♡ 結構飛んだね？♡♡ 床びちゃびちゃだよ？♡♡ でも～俺としてはもっと長く楽しんで欲しいからさあ……一旦休みなよ？♡♡」

彼の掌が私の臀部に添えられる。しかし次の瞬間……彼が下から強く突き上げてきたのだ。

どちゅんッ！！！！♡♡♡

「おっほオオオオ～～～ッッ！？！？！？！？♡♡♡」

先ほどまでの余裕とは打って変わり、荒々しい雄の本
能をむき出しにした荒々しい動作だった。

「うおッ……！？♡♡ あっ♡それしゅきい♡はっ
はっ…はうっ♡ああああっ♡んんんっ♡♡♡子宮口
叩かれてりゅッ♡♡ 深いッ深すぎるうッ♡♡ こんな
の、普通のおちんちんじゃ……ない……っ♡ んほおお
♡オホッ♡しゅごいおちんちんッ♡♡おっちゃん
ぽオオオッ♡♡♡♡」

びくっ♡びくびくっ♡♡♡♡ びくっ♡びくび
くっ♡♡♡♡ びくっ♡びくびくっ♡♡♡♡

「おお……？♡♡♡ いきなり獣みたいに咆哮するじゃ
ん？♡♡♡ そういうのもエロ可愛いね～♡♡♡ ん、
ねえ……♡♡ 俺に決めちゃわない？♡♡ マッチング
成立なら、ルール違反にならないよお♡♡♡ 告白しな
がらイッて欲しいなあ♡♡ 一生忘れられない、思い出
にしてあげるよ？♡♡」

「ああんッ♡♡決めますッ♡♡♡♡ 1 2 番の、貴
方とマッチングします……ッ♡♡♡だから、だか
らあ……♡♡ あっ♡あっ♡おきたあっ♡あんっッ
♡♡おちんちんッ♡♡あうっ！♡♡」

遅しい彼が体勢を入れ替え私を組み敷くと、体重をかけて固定する。ガッチリ♡正常位で抽送が始まると、全身が大きな身体に拘束された状態になる。一方的に穿たれる形となったが、私は期待してしまった。

ピコンッ！

『男性12番様、クリトリス07番様のマッチングが成立しました♡♡♡おめでとうございます♡♡♡』

(ああ……アナウンス早い……♡♡♡やっぱり、エッチ見られてるんだ……♡♡♡)

「わーい♡マッチング成立セックスだぁ♡♡ 君が俺を選んてくれたんだから……もっと深く繋がらなきゃね～？♡♡」

彼の動きが一段と激しくなり、ギシギシ♡スプリングが軋むほどの勢いで、おちんちんを打ち付けられる。

「おっ♡おほっ、おぢんぼ♡♡マッチングおぢんぼッ♡♡おっおほっ♡♡おッ♡♡ぢんぼ、きもちいい♡♡きもちいいッ♡♡♡♡♡」

ばちゅっ！♡ぶちゅっ！♡ぐちゅっ！どびゅっ！♡♡

結合部からは、泡立った分泌物が溢れ、シーツに大きな染みを作っていた。そんな中突然動きが緩慢になり、亀頭で子宮の奥だけを押し続けるような……ねっとりとした刺激へ移行する。

「え……？♡ やめ……ないでっ……お願い……っ」

「ふふ……せっかくだから～ここからゆっくり楽しもう
と思ってね～？♡♡ ほら……耳舐めしてあげるから力を抜いて～？♡♡」

「ひゃうッ！？♡ 耳……だめえ……っ♡ ああ……ん
んッ……」

じゅるっ♡ちゅぽっ♡ぬりゅっ♡♡

舌が耳穴を犯す水音がダイレクトに鼓膜を揺さぶり、脳髓まで甘い痺れを運んでくる。同時に、ゆっくり♡ねっとりした動きで、腫れたおまんこ全体を揉みくちやにされると、今までに無い種類の陶酔感に包まれていく。

「ほら……耳と子宮どっちが気持ちいい？♡♡ ねえ答えて～？♡♡」

「わかんない……ッ♡♡ どっちもおッ♡♡ 気持ち

いいのお、幸せえ……っ♡♡ あ〜〜〜〜んっ♡こ
れっ♡これ、これえ♡この、リズムしゅぎい♡♡あへあ
へ喘ぎしながら、またイクウツツ……ッ！？！？♡♡
♡」

再び絶頂を迎えたものの、今度は波が引いていかな
い。むしろ、増幅して体内に留まり続ける感覚だ。その
タイミングを見計らったかのように、再び速度を取り戻
した。女を喜ばせる律動が始まった。

どびゅっ！ぶびゅっ！どくどくんっ！！♡♡♡ コ
リッ……♡ コリッ、コリッ……♡♡♡♡ドチュドチュ
ドチュツ♡♡♡♡

「おおあ あ〜〜〜〜ッッ！！！！♡♡♡出
りゅッッ！！♡♡ んほおツツ♡♡ あおおおツツ♡♡
おおツ……♡♡子宮に直接……っ♡♡ 濃厚ザーメン♡
びゅうびゅう♡♡かけられちゃって……りゅうッッ！！
♡♡ んおっほおおツツ♡♡おオおっ！？♡♡♡アクメ
しゆるツツ♡♡イグイグイグウウウツツ……！！！！
♡♡♡」

熱い奔流が最奥へ放たれるのを感じながら、私は声に
ならない絶叫で、白目をむいていた。最後のオーガズム
を迎え、意識を一瞬手放した――。

ちゅく……♡しゅる……♡すり……♡♡すり……♡♡

「ん……♡あ……？♡あれ……わたし……♡」

意識がぼやけている間に、胸の辺りが熱い。何やら大事な部分を弄ばれていたようだ。

むにゅうううううっ♡♡♡♡ずりゅううう
うっ……♡♡♡♡

「ふぁあん……？♡ え……っ♡ なに……これえ？♡」

ぼんやりした意識の中で、目を開けたら……私の胸の谷間におちんちんが埋まっていた。自分がどんな格好をしているか理解した。寝転び両脚を開いた状態の私に、彼が跨っている。正確には……私のおっぱいの間におちんちんが鎮座して、彼が所謂パイズリを楽しんでいる最中だった。

「あ……起きちゃったね～♡」

彼が悪戯っぽく笑う声が耳に入った。甘いテノールが、妙に上擦り艶めかしく聞こえるのは気のせいだろうか。

「えっと……♡♡あん♡あの……これ……♡♡どうい

状況なんですか……？♡♡」

びくっ……♡びくびくっ……♡♡♡♡

頭がぼーっとする中尋ねると、たぶたぶ♡と揺れるパイズリ光景を楽しんでいる彼は、乳肉の間から覗く、赤黒い亀頭を指でつつきながら答えた。

「ごめんね～？♡ 君が気絶してる間にちょっと遊ばせてもらったよ～♡♡♡ おっぱいに♡おちんちん元気にして貰っちゃったあ♡♡もうすっかりガチガチになってるから、おまんこを喜ばせてあげられるよお♡♡」

まだ状況を完全に把握しきれていないながらも、目を見開くと12番の彼は首を傾げた。見上げると、確かにそのデカチン♡部分は反りかえるくらい屹立し、先端からは透明な孕ませ汁が滴っていた。無意識のうちに喉が鳴る。おっぱいの谷間が、ひりひり♡じんじん♡した。

「……|は、……恥ずかしいです♡♡」

「え～？ 何言ってるの～？♡♡ 俺らマッチング成立して、恋人になったじゃん？♡♡ 即エッチからのおっぱいプレイも当たり前でしょ～？♡ ほら……おっぱいにもっと力を入れて、おちんちん挟んでみてよ～？♡♡」